

報告

北海道医師会・北海道獣医師会 連携シンポジウム

常任理事・地域保健部長 後藤 聡

去る4月15日（日）当会館において、北海道獣医師会との共催による連携シンポジウムを開催し、166名にご参加いただいた。

本シンポジウムは、平成28年3月に北海道獣医師会と締結した学術協力の推進に関する協定に基づき開催しており、今年で2回目となる。

今回は、人獣共通感染症である「ダニ媒介性脳炎（TBE）」をテーマに3名の講師から、基礎知識や実際に治療した症例についてご講演いただいた後、フロアとのディスカッションでは活発な意見交換が行われた。

以下、概要、発言要旨を報告する。



講演 1

「ダニ媒介性人獣共通感染症ウイルスの基礎
～ダニ媒介性脳炎と重症熱性血小板減少症候群～」
北海道大学大学院獣医学研究院衛生学分野

公衆衛生学教室 准教授 好井 健太郎 先生

ダニ媒介性脳炎患者は、渡島管内で1993年に国内で初めて報告された後、2016年に23年ぶり2例目となる患者が札幌で、2017年に函館と札幌で3、4例目が相次いで報告され、うち2人が死亡した。今、北海道でダニが持っている感染症が大きな話題となっているが、ウイルスはずっと昔から北海道の広域に存在し、今まで見過ごされてきた感染者が表に出てくるようになっただけで、突然、感染者が出てきたものではない。

ダニ媒介性脳炎は、ダニによる吸血後1～2週間の潜伏期間を経て風邪様症状を引き起こし、重症化すると脳炎症状を呈する。致死率が高く、回復しても4～6割に知覚障害や運動障害が残る。特異的治

療法は存在せず、対症療法のみである。2例目の報告をきっかけに、北海道と連携して診断体制を整備した成果により3、4例目の診断につながった。ダニ媒介性脳炎は医療関係者も含めて世間に知られておらず、認知度が低く診断できる施設が限定されることから、十分な周知と啓蒙活動を行い、診断体制を確立しなければならない。ヒトにおける感染状況の詳細を明らかにするとともに、適切な予防対策（ワクチン導入等）を図る。個人レベルの予防としては、ダニに咬まれないようにすること、咬まれた場合にはすぐに医療機関に行くこと、市立札幌病院では、希望者に対してワクチン接種を行っている。

講演 2

「当院におけるダニ媒介性脳炎の臨床、病理学的所見」
市立札幌病院

神経内科部長 田島 康敬 先生

2016年に発症した2例目の男性患者の急速な経過で脳死に至った症例の治療経過や臨床所見の報告があった。病理学的に脳、せき髄、坐骨神経に広範な変化が認められ、免疫組織学的に神経細胞体内にダニ媒介性脳炎ウイルスが証明された。本道は流行地であり、類似の臨床所見、脳脊髄画像所見を呈する症例では、ダニ媒介性脳炎を鑑別として考慮する必要があり、発症予防とより有効な治療法の開発が必要である。

講演 3

「ダニ媒介性脳炎患者の治療経験」

医療法人北祐会北祐会神経内科病院

免疫性神経疾患部門部長 中村 雅一 先生

2017年に発症した4例目の男性患者の症例の治療経過や臨床所見の報告があった。意識障害で搬送されたが、ダニ刺咬歴があったことから保健所を通じて北大で血清検査を行い、ダニ媒介性脳炎と診断された。意識障害以外にもさまざまな神経症状が診断を難しくしており、患者は救命し得たが、高度の後遺症が残った。北海道は予後不良な極東型ウイルス脳炎流行地域でもあり、早急なワクチン導入が期待される。

◇

今回のシンポジウムのテーマであった「ダニ媒介性脳炎」は、森林や草原などに潜んでいるフラビウイルスに感染したマダニに咬まれたヒトが脳炎を発病する人獣共通感染症である。最近では5月末に旭川市で国内5例目となる患者が発生した。国内の症例はいずれも北海道内であり、より身近な問題として捉え、予防対策などの知識を共有して道民に周知していく必要がある。

次年度以降も引き続き本シンポジウムを開催し、ワンヘルスの理念のもと、北海道獣医師会と共に人獣共通感染症等に関する情報を発信し、啓発に努めたい。